

中友會 通信

vol.11 2026.4

揮毫 福田康夫 元内閣総理大臣、中友会最高顧問



DuanPress

日本僑報社 発行

問い合わせ先 中友会事務局

豊島区西池袋3-17-15 湖南会館

Tel : 03-5956-2808

Mail : zyh@duan.jp



音楽でつなぐ心の架け橋

—— 加藤登紀子と中国との縁 ——



歌手活動60周年記念コンサートのステージに立つ加藤登紀子さん。2025年8月、加藤さんの生まれ故郷である中国・ハルビンにて

先日、歌手活動60周年を迎えた加藤登紀子の記念コンサートを訪れた、その機会にインタビューをさせていただきました。（聞き手：段景子）

Q. 加藤さんは中国・ハルビンで生まれたとお聞きしました。ご自身の原点について教えてください。

加藤登紀子（以下、加藤） 私は1943年、中国のハルビンで生まれました。幼少期を中国で過ごした経験は、その後の人生観や価値観に大きな影響を与えていると思います。戦後間もない時代に異文化の空気の中で育ったことで、国境や民族を越えて人と人が理解し合うことの大切さを自然に感じるようになりました。

私にとって中国は単なる出生地ではありません。人生の原点とも言える場所であり、文化的な記憶として今も心の中に残り続けている存在です。

Q. 歌手としてのキャリアはどのように始まったのでしょうか。

加藤 1965年、東京大学在学中に第2回日本アマチュア・シャンソンコンクールで優勝したことがきっかけで、歌手としてデビューしました。

1960年代後半から1970年代にかけて「赤い風船」「ひとり寝の子守唄」「知床旅情」などの曲を発表し、多くの方に聴いていただけるようになりました。その後も数多くの作品を発表し、これまでにリリースしたアルバムは90枚を超えています。

力強さと温かさを併せ持つ歌声を大切にしながら、世代を越えて多くの方に音楽を届けてきました。長いキャリアの中で、私は単なる歌手としてだけでなく、社会に向けてメッセージを発信する表現者として活動してきたと思っています。

Q. 音楽活動は日本だけでなく海外にも広がっていますね。

加藤 はい。私の音楽活動は日本国内にとどまらず、世界へと広がっていきました。ニューヨークのカーネギーホールで公演を行ったこともあり、さまざまな国でコンサートを開催してきました。音楽を通じて国際交流ができることは、とても大きな喜びです。

最近ではFUJI ROCK FESTIVALのような大型音楽イベントにも出演し、若い世代の観客とも出会うことができています。また、日本酒を楽しみながら歌う年末恒例の「ほろ酔いコンサート」も長年続けてきました。

こうした活動を通して、音楽には国境を越えて人々の心を結びつける力があると実感しています。

Q. 近年は平和についてのメッセージも積極的に発信されていますね。

加藤 世界の情勢が大きく変化する中で、平和について考えることはますます重要になっていると感じています。私はこれまでも繰り返し「平和」の大切さを訴えてきました。

2020年代に入ってから、軍事的緊張の高まりや核兵器の問題について懸念を感じています。文化に関わる者として、平和を守る必要性について発言することは大切だと思っています。

軍事力の拡大ではなく、対話と理解が重要だと私は考えています。これまで歌い続けてきた「命」「平和」「人と人とのつながり」というテーマとも深く重なる思いです。

Q. 環境問題への取り組みについても教えてください。

加藤 私は長年、環境問題にも取り組んできました。1997年にはWWF ジャパン顧問およびWWF パンダ大使に就任し、自然環境保護の重要性を伝える活動を行ってきました。

また、2000年から2011年まで環境省およびUNEP（国連環境計画）の親善大使として、アジア各地を訪れました。現地の自然環境の状況を知り、それを多くの人に伝えることも大切な役割だと思っています。

ステージや執筆を通じて、自然と共生する社会のあり方について提案し続けてきました。音楽と社会問題を結びつける文化活動として、多くの人に関心を持っていたら嬉しいです。

Q. 中国との文化的なつながりについて、どのように感じていますか。

加藤 中国のハルビンに生まれたということは、私の人生にとってとても大きな意味を持っています。これまで文化交流の重要性についても、さまざまな場面で語ってきました。

音楽には言葉や国境を越えて人々の心を結びつける力があります。そうした信念のもと、私はアジア各地で交流を続けてきました。中国を含むアジア地域との文化交流にも強い関心を持っています。

互いの文化を理解し合うことが、人と人の関係を深める大切な一歩になると思います。

Q. 2025年には歌手活動60周年を迎えました。今のお気持ちをお聞かせください。

加藤 2025年に歌手活動60周年を迎え、記念アルバム『for peace』と『明日への讃歌』の2枚をリリースしました。

長い音楽人生の中で、私は常に平和と人間のつながりを歌い続けてきました。歌を通して、多くの方々の心に何かを届けられていたら嬉しいです。

これからも音楽を通して社会に問いかけを続け、人と人、そして国と国を結ぶ架け橋のような存在でありたいと思っています。



2025年8月23日に開催されたコンサートにて



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

人と人との繋がり

団体職員 福崎 文香



夜行列車出発前に行った火鍋屋にて

大学四年生の夏、私のアイデンティティは容赦なく破壊された。どうにも衝撃的で、昨日のことのよう鮮明に覚えている。

当時、バックパッカーとして世界の秘境を訪れることにはまっていた私は、九寨溝と拉薩をメインの目的地として二週間の一人旅に出た。九寨溝近くのホステルでたまたま相部屋になった中国人の女の子が、何やら中国語で話しかけてきた。私はどうやら中国人っぽい顔をしているようだ。私が日本人だと分かると、一緒にご飯を食べようと誘ってきて、その場で彼女の友人二人を紹介された。互いに同世代ということもあり、すぐに意気投合。次の日には4人で西安まで向かい一緒に観光することになった。

西安行きの夜行列車のチケットを買うのに、私が外国人であったことから手続きにてこずり、4人で駅を3時間ほどかけずり回った。結局、購入はできたが4人ばらばらの席しかとれなかった。夜行列車の時間まで火鍋を

食べることになり、3人が食べ方や具材の説明を手取り足取り教えてくれた。列車に乗ると、席が離れて一人になる私のことを案じて、3人が列車長に直接掛け合ってくれた。列車長は名探偵コナンが大好きだったので、私を見るなり関係者車両の一室を空けてくれた。日本だったらあり得ない。静かでありながらも快適な席だったため、ラッキーと4人でハイタッチした。西安に着くと、いくつかの寺院を巡り、兵馬俑を見に行った。夜にはバーに行き、マスターが特別にマンゴーラッシーカクテルを作ってくれ、美味しさのあまりこの時も4人でハイタッチした。

西安最終日。私は拉薩行きの鉄道チケットを事前を買っていたため、3人とはこの日でお別れとなる。楽し過ぎて拉薩も4人で観光しようと言われたが、予約がいっぱいで鉄道チケットがとれなかった。この日は朝からずっと、3人はどこに行こうとも何をしようとも言わず、何やらずと相談をしていた。外出しようと言うのでとりあえずついて行くと、そこは西安伝統料理のレストランで、伝統衣装を着ながらサプライズのおもてなしをしてくれた。3人のうちの一人が西安出身で、私が西安のことを知ってくれるのが本当に嬉しいと話してくれた。

別れ際、中国に来る前からこの4日間もずっと思っていたことを彼ら3人に聞いてみた。

「我是日本人。你是中国人。朋友、可以吗？」

「你是文香。」

このやりとりは鮮明に覚えている。ぼろぼろと涙が出て止まらなかった。思えば、物心ついた頃からニュースなどで中国の日本製品不買運動や反日デモ等を見ていたからか、中国人は日本人が嫌いなのだと勝手に一般化して決めつけていた。だから聞いてみたのだが、3人が笑いながら言ってくれたその答えを聞いた時、私の質問があまりにも次元が低く稚拙であることに気づき、恥ずか

しくなった。それと同時に、私がこれまで日本で築き上げてきたアイデンティティといものがきれいにぶち壊された。当時、海外旅行が好きだった私は、いつもどこか日本人という肩書きを過度に大切にしていた。しかし、日本人であるというよりも何よりも、まず、私は私なのだ。どこで生まれどこで育って、家族のルーツはどうで……確かにそれも大事なことだが、それよりも前に、私は福崎文香という一人の人間なのだ。そして、私の目の前にいる相手も同じく、一人の人間なのだ。互いに繋がりを合おうとする時、それ以外の要素など何一つ必要ない。そんなごくごく当たり前だが最も大切なことを彼ら3人が思い出させてくれた。

そして、もうお分かりかもしれないが、この4日間、私と三人に共通言語と呼べるような言語はなかった。当時の私は、中国語は超簡単な単語しか分からなかったし、英語での会話もままならなかった。翻訳アプリなども何回か使ったが、結局互いに身振り手振りの方が伝わるのが分かり、お役御免となった。しかも、私以外の3人での会話すらも、私が理解できるようにとなるべく身振り手振りを付けてコミュニケーションをとってくれていて、嬉しいを通り越した気持ちになった。人と繋がろう

とする時、たしかに言語の違いは問題となり得る。しかし、私たち4人のこの4日間を振り返るとどうだっただろうか。言語よりも大切なものが、私たちの繋がりを補うばかりか、むしろ強固なものにしてくれていた。それはまさに、お互いがお互いを分かり合いたいという気持ちだったと思う。

相手を同じ一人の人間として見ること。相手を理解しようとする気持ち。これらは紛れもなく、今日のグローバル化する社会において本来あるべき人と人との繋がり方なのではないか。最も大切なことをたくさんの人がなおざりにしてはいないか。少なくとも私は、中国という大地とそこに住む友人が身をもって教えてくれたことを、一生をかけて大切に、次は私が身をもって誰かに伝えていきたい。この輪が連鎖し、日中、延いては世界中の友好につながることを心から願っている。

福崎 文香 (ふくざき ふみか)

このエピソードをきっかけに、日中ビジネスに携わりたいと考え、中国市場に積極的に進出する日系メーカーに就職。国際物流部門の中国・台湾拠点改善チームにて、現地メンバーとともに物流現場の生産性向上活動に従事した後、現職にて公的機関で日本の中小企業の海外展開支援を行っている。2022年9月、中国の大学院に進学。

「私の中国物語」その②

手渡された一元硬貨の重み

フリーアナウンサー 多田 記子

2018年の夏、私は大連を一人で旅行した。

大連を選んだ理由は、大連の美しい浜辺の映像をテレビで見たことがあり、なんてきれいな所なのだろうという印象があったこと、また中国人の友人によれば、大連は日本とゆかりの深い場所で、中国で一番親日家が多く、日本人が作った道路などのインフラもあり、有名な日本語学校もあるという話であった。また、北京や上海といったありがちな行き先よりも、大連というアイデアは最適に思えた。

成田から大連空港に着くと、電車で中心街へと向かった。ホテルに荷物を置き、まず観光バスでなく、地元の人が利用する路面電車に乗りたくなった。一元という安さで移動できるのも魅力で、とにかく、あの映像で見た、

綺麗な海辺の方向を目指した。そして、海辺近くの街を散策した後、大連駅に向かう帰りの路面電車に乗車したものの、その便は大連駅まで行かず、途中の停留所までであった。その電車はたまたまそこが終点で、大連駅まで行く便はもう一本あとであった。私は中国語が全く話せないのだが、そのようなことを乗客や路面電車の運転手さん達がなんとかして親切に教えてくれる。教えてくれたのはいいのだが、途中で訳も分からず降ろされた時は私はかなり当惑していたようで、乗り合わせた乗客が心配してあれこれと話しかけてくれた。それで、一回降りて他の便に乗り直す必要があるとわかったのだが、お財布を見たらもう一元硬貨がなく、私はかなり困った顔をしていたようだ。すると、それを察した子連れのお母

さんが、見ず知らずの私に1元硬貨を手渡してくれたのである。そして、その親子は何事もなかったかのように立ち去って行った。1元は日本円で15円ほど（当時）。しかし、この1元のなんと嬉しかったことか。私は思わずその1元硬貨の写真を撮り、その親切を忘れることなく、今この文章を書き、あの時のお母さんに改めて感謝の気持ちを噛みしめている。

停留所で次の便を待っていると、そこにはもう一人路面電車を待つおばあさんの姿があった。見ると私のような見ず知らずの日本人を、手招きするのだ。何かと思えば、そっちは日差しが強いからこっちの日陰に入りなさいよ、という手招きであった。ここでもまたさりげない優しさに包まれた。鮮やかなピンク色のつば広のサンバイザーを被ったおばあさんだった。

大連駅に戻り、やはり観光バスに乗って大連の街を一周したいという気分になった。もう夕方になりかけていたから、その日最後の便がもうすぐ出発というタイミングだった。しかも乗客は私だけ。私は一番前のバスガイドさんのすぐ隣の席に陣取った。

若くて元気な女性のガイドさんだったが、私が英語で質問しても、英語はできないいらしかった。しかし通訳アプリを駆使し、なんとか私とコミュニケーションをとってくれ、牡蠣の水餃子を食べるべきだ、とか、色々な情報を教えてくれた。

翌日、スーパーマーケットで買い物をしたり、ショッピングセンターに行ってネイルをやってもらったり、カフェでレモネードを飲んだり、何をやっても物価が安いのですごく得した気分になる。そんな一日を満喫し、夕方、私は公園でひとりぼんやりしていた。すると、一歳になるかならないか、ついこの間歩いたばかりと思われる中国人の男の赤ちゃんが、じっと私を見ているのに気がついた。その子は、一歳なのに、私が一人で寂しそうにしていることを気にかけてくれているようであった。彼は若い両親に連れられて公園に来ていた。自分が立ったり歩いたりするのがやっとなのに、私を見て気遣う姿があった。そして、私の方に一生懸命歩いて来てくれ、何か話しかけてくれた。まだ話もできないのに。私は両親の方を見て、名前は？ 歳は？ といった会話をしたと思う。あの男の子のことも、忘れられない。ひとりぼっちの私のことを、じっと見て気にかけてくれて、本当にありがとう。

翌日は旅順まで地元の路線バスで行こうと思い、苦勞もあったがなんとかたどり着いた。帰りのバスに乗車中、気づいたら空港が見えるではないか。しまった、大連駅ではなく空港に来てしまった、果たしてどうしたものかと慌て、隣の乗客に尋ねても言葉が通じない。両手を左右に広げて飛行機が飛ぶ仕草を示しにやにやするばかりだった。仕方なく、「このバスの中に英語を話せる人はいますか」と大声で英語で叫んだ。すると一人だけ英語を話す初老の紳士が乗り合わせていた。話すと、そのバスは空港経由で終点は大連駅に行くので大丈夫だという話だった。「あなたは中国語ができないのに一人で旅順まで行って帰ってくるなんて、なんてboldなんだ」と、その紳士に言われた。そのboldを「大胆」と訳すか「無謀」と訳すか、その時の雰囲気から察すると「無謀」だったような気がするが、大連での3日間は中国の人々の優しさに包まれた良い旅であった。あの、東洋のサンフランシスコのような街、大連を、またいつか訪れたい。



大連で子連れのお母さんに手渡された思い出の1元硬貨

多田 記子 (ただのりこ)

フリーアナウンサー。東京都出身。経済・ニュース番組を中心に日経CNBC、J-WAVE、テレビ東京、文化放送などに出演経験。2003年より、日経の英文媒体 (NIKKEI Asia) をテキストに英語を勉強する Let's read the NIKKEI in English (ラジオ日経) 番組キャスター。

「私の中国物語」その③

夢はあきらめない

大学教員 柳井 貴士



学内予選後の懇親会（これが楽しみ！）

「わたしは日本に行ってみたいのです」

流暢な日本語で熱心に訴えたのは、中国人の学生Kさんだった。

3年前、私は日本語教育のため中国は甘粛省の省都蘭州市にある大学へ赴任した。私は二年生の授業を主に担当した。日本語を学んでまだ一年程度の学生たち。中にはアニメやゲームを通して日本語学習を行っている者もあり、学びの進度はまちまちだった。ひとつ嬉しかったのは、彼らが一様に、学習に対して一生懸命だったことだ。本学には3年次に日本の国立大学への派遣留学制度がある。みな、未知の国への留学の機会をうかがっていた。

Kさんは、天津市出身の女子学生だ。私が赴任した初日から、数人の仲間と共に、大学の施設案内をしてくれたり、日本語サークルの顧問になるよう熱心に勧誘してくれた。日本語が上手だな、それが彼女の第一印象だった。

日本語サークルは、文化や自然、若者たちの日常会話などを紹介し、日本への関心を深めることに一役かっていた。日本語学科以外の学生も数多く参加してくれ、サ

ークル活動は盛況だった。会后にはかならず懇親会が行われた。懇親会の席、慣れない中国語に戸惑う私に、Kさんは丁寧に通訳をしてくれる。「彼は、女の子たちにいじられて泣きそうになっています（笑）」、「彼女は生魚を食べる日本人を理解できないと言っています」、「先生は日本のアイドルで誰がいちばん好きか、皆が知りたがっています」。私の目を見てゆっくりと話す誠実さに感心した。でも、ときどき、彼女は苦笑する。「方言なので、何を言っているかわかりません」。

中国は広い。多様な民族が生活しており、言葉も文化も多彩だ。そして、歴史も深く長い。私が中学生のとき、社会科の先生が言っていた。日本文化にとって中国は祖父、朝鮮半島は父なのだ、と。その祖父との関係は、近代になって大きく展開した。その先に、不幸な戦争があった。多くの中国の人々が犠牲になった。その中に、Kさんの曾祖父母もいた。

Kさんの父も母も、娘が日本語を勉強することを快く思っていない。桜の美しさを知り、日本のアニメ映画のとりこになっていたKさんは、日本語学科への進学だけはなんとか認めてもらった。しかし、留学については許してもらえなかった。

「わたしは日本に行ってみたいのです。その自然を感じ、文化を学びたい、たくさんの日本人と友達になりたい」ある日、Kさんは真剣なまなざしで私にそう告げた。留学が難しいなら、他に日本へ行く方法はないか。

調べると、いくつかのコンテストがヒットした。上位入賞者には副賞として日本行きのチャンスがもらえる。私はまず彼女に「作文コンクール」への参加を促した。授業の成績は抜群によい。作文も会話力も、学年でトップクラス。「自信がありません」という彼女の言葉は無視した。とにかくテーマに沿って、日本への思いを素直に書いてみなさい。すると、素晴らしい作文が出来上がった。手直しを繰り返し、完成原稿をコンクールへ送った。

数か月後、結果が発表された。彼女は全中国で二等賞を受賞した！ 一等の日本旅行は逃したけれど、初めての挑戦での好成績に、Kさんは涙を流しながら喜んだ。

授賞式は日本大使館で行われる。私たちは北京へ向かった。盛大な授賞式だった。中国のいろいろな大学で日本語を学ぶライバルたちに接し、彼女は自分が学んできたことの正しさを実感したに違いない。晴れやかな笑顔で式に臨むKさんはまぶしかった。同時に、手が届かなかった一等賞への思いもあふれたようだった。満足と悔しさ。Kさんはその思いを来年につなぐと宣言した。

「実は、母がこの授賞式に来たいと言いました。大使館でやるなんてすごい、と言ってくれたのです」授賞式後、Kさんは言った。

仕事の関係もあり、当日北京に来ることは出来なかった。だけど、Kさんの受賞は、両親の心を確実に動かしたのだ。「日本語の勉強を頑張れ」。両親からその言葉を受け取れたことが、受賞よりも嬉しいご褒美だったとKさんは笑顔で言った。私は作文の学習機会を通し、大げさに言えば、民族や家族にとっての希望の光を見たような気がして、Kさんとの打ち上げの席、ビールを片手に目頭があつくなった。

大学3、4年のコンクールでは思うような成績を残せなかった。私は指導者として責任を感じた。Kさんの日本語能力はさらに進化している。スピーチコンテストでも好成績を残していたのに……。

だけど彼女は笑顔だった。「先生、両親が大学院で日本語の研究をすることを許可してくれました！ 私は西安の大学院に合格しました！ 先生の指導のおかげです、ありがとうございます！」嬉しい報告だった。彼女の實力なら、大学院在学中に日本に留学もできるはずだ。Kさんは自分の夢を、その努力と素直さで手繰り寄せたのだ。諦めない心、日本を好きでいてくれる気持ち。私の方こそ、たくさんのことを学ばせてもらった。

柳井 貴士 (やないたかし)

2017年から中国は甘粛省にある蘭州大学外国語学院にて教員となる。中学生時代に読んだ井上靖「敦煌」と、その映画『敦煌』を見て以来、甘粛省をふくめたシルクロードに関心を抱いていた。中国の多くの友人の助けもあり敦煌を中心とした西北地域を旅行できたことと、蘭州大学で日本語を一生懸命学んでくれる学生との出会いが一番の思い出。現在は愛知淑徳大学創造表現学部で教員を務める。

「私の中国物語」その④

約束を果たすために

大学生 吉村 美里

私は当時、ドン底に突き落とされた気分だった。2020年が始まって早々、新型コロナウイルスが出現し、徐々に世界中で広がりを見せた。当時の私は、高校3年生でちょうど卒業を間近に控え、卒業旅行などの計画も立てていた。さらに、大学生になったら長期休暇を利用して、旅に出かけてみたいと考えていた。しかし、現実はいちど描いていたものとはかけ離れたものとなってしまった。旅行どころか、充実したキャンパスライフを送ることさえもできなくなった。しかし、1年経った今は現実を受け止め、今後中国や世界へ旅行できるようになった時のために行動しようと動き始めている。このように考えるようになったのは、あの時約束した友達に再会するためである。

私が高校2年生の時、1人の女子中国人留学生と同じクラスになった。その頃の私はちょうど第二言語として中国語を習い始めたばかりであった。さらに、奇跡的に

席も前後になったのだ。初めはどう接して良いのかわからなかったが、彼女が日本語を使い、私が習った中国語を駆使してお互いに教え合い、会話をしていくうちに、毎日一緒に過ごす仲になった。しかし、仲良くなってからしばらくして、お別れの時が来てしまった。私はとても寂しかった。たった半年ほどしか一緒に過ごせなかったのも、もっと一緒にいたかった。そのような気持ちで参加したフェアウェルパーティのことを私は一生忘れないだろう。なぜなら、そのお別れ会で二人だけの約束をしたからである。

彼女とお別れしてからの私は、中国語の能力を伸ばすためにスピーチコンテストや資格試験の学習に挑戦するようになった。親身になってご指導いただいた先生方の扶助もあり、実際に私は訪中するチャンスを手にすることができた。しかし、残念なことにコロナウイルスの蔓延によってそれを叶えることができずに終わってしまった

た。それでも私の中国、そして彼女に対する思いは変わらない。なぜなら、彼女が私の人生、そして中国に対するイメージを変えてくれたからである。さらに彼女とは、微信を使った交流が今でも続いている。私はそれがとても嬉しくてたまらない。離れていても相互に繋がれる社会がとても有難いなと感じている。

今の時代、SNSを利用して交流したり、言語学習やバラエティ動画に触れたりする機会がたくさん存在する。私自身、YouTubeを用いた中国語関連動画を見て、楽しみながら中国語を学習している。また、大学の講義でも中国の歴史や文化など、幅広い分野の講義を受けている。中国語や中国について深く学ぶごとに、より一層中国に対するイメージが変化していくのを感じている。日本人は中国に対してマイナス感情を抱いている人が少ないだろう。しかし、同じ歴史でも相互の立場になって歴史を見つめ直すことで、これからどのような時代を歩んでいくべきなのかを考えるきっかけにもなり、相互理解につながると考える。

また、身の回りにある商品や食料などを通して、知らず知らずのうちに中国と関わっていることを、私自身忘れないようにしたい。どうしても私は、コロナ禍でできない旅行や留学などに注目してしまう。しかし、身近にあるものやSNSを通じて、日中間で深いつながりを持つことは可能である。だからこそ、今ある環境の中で自分自身が精一杯できる行動をしていきたいと考えようになった。

そのように考えるようになったのを機に、言語学習にも力が入るようになった。今旅行や留学ができなくても、オンライン留学など新しいものが生まれている。もちろ

ん、実際に現地に行って多様な人々と関わり、生の中国を肌で感じる事が一番の相互理解に繋がるだろう。実際、これまでに一度だけ中国に行ったとき、日本で学習するだけでは得ることのできない現地の雰囲気や人々の優しさに触れることができた。これこそが肌で感じるということであり、相互理解を深めるということだと感じた。しかし、現地に行けないから今何も行動しない道を歩み続けると、結果として将来必ず後悔することになるだろう。だからこそ、たとえオンラインであったとしても、今ある環境の中で日中間の相互理解できるチャンスを逃さないように活かしていきたい。

最後に、私には夢がある。それは、あの時彼女と交わした約束を果たすために、いつか彼女に会いに行くことだ。コロナウイルスによる生活や移動の制限がいつまで続くのかわからない。私にとって今すぐにも訪中できないことが非常にもどかしい思いである。その上今できることは限られている。しかし、いつか世界中を自由に移動できるような時代に戻った時、何不自由なく行動できるための言語力を身につける。そして、中国を多様な視点から思う存分堪能できるように中国についての知識を深める。これらが今の私にできる、夢を叶えるための目標である。何年後になるかはわからない。それでも私は、いつか訪中できる日が来ることを願って相互理解を深めていく。

吉村 美里 (よしむら みさと)

立命館大学国際関係学部国際関係学科2回生。2001年京都府生まれ。2020年立命館大学国際関係学部入学。現在、国際協力開発プログラムで国際的な社会・経済発展の条件や貧富の格差の問題を実践的に学修している。最近、第二言語などの言語学習に熱中している。



全国高校生中国語スピーチコンテスト (2019年12月)